

[B年] 聖霊降臨節第6主日(2026年6月24日)

【旧約聖書日課】 エステル記 4章10節～5章8節

4¹⁰ エステルはまたモルデカイへの返事をハタクにゆだねた。¹¹「この国の役人と国民のだれもがよく知っているとおりの、王宮の内庭におられる王に、召し出されずに近づく者は、男であれば女であれば死刑に処せられる、と法律の一条に定められております。ただ、王が金の笏を差し伸べられる場合にのみ、その者は死を免れます。三十日このかた私にはお召しがなく、王のもとには参っております。」¹² エステルの返事がモルデカイに伝えられると、¹³ モルデカイは再びエステルに言い送った。「他のユダヤ人はどうであれ、自分は王宮にいて無事だと考えてはいけません。¹⁴ この時にあたってあなたが口を閉ざしているなら、ユダヤ人の解放と救済は他のところから起こり、あなた自身と父の家は滅ぼされるにちがいない。この時のためにこそ、あなたは王妃の位にまで達したのではないか。」¹⁵ エステルはモルデカイに返事を送った。¹⁶ 「早速、スザにいるすべてのユダヤ人を集め、私のために三日三晩断食し、飲食を一切断ってください。私も女官たちと共に、同じように断食いたします。このようにしてから、定めに反することではあります。私は王のもとに参ります。このために死ななければならぬものでしたら、死ぬ覚悟しております。」¹⁷ そこでモルデカイは立ち去り、すべてエステルに頼まれたとおりにした。

5¹ それから三日目のことである。エステルは王妃の衣装を着け、王宮の内庭に入り、王宮に向かって立った。王は王宮の中で王宮の入り口に向かって王座に座っていた。² 王は庭に立っている王妃エステルを見て、満悦の面持ちで、手にした金の笏を差し伸べた。エステルは近づいてその笏の先に触れた。³ 王は言った。「王妃エステル、どうしたのか。願いとあれば国の半分なりとも与えよう。」⁴ エステルは答えた。「もし王のお心に適いますなら、今日私は酒宴を準備いたしますから、ハマンと一緒にお願いします。」⁵ 王は、「早速ハマンを来させなさい。エステルの望みどおりにしよう」と言い、王とハマンはエステルが準備した酒宴に赴いた。⁶ 王はぶどう酒を飲みながらエステルに言った。「何か望みがあるならかなえてあげる。願いとあれば国の半分なりとも与えよう。」⁷ 「私の望み、私の願いはと申します」とエステルは言った。⁸ 「もし王のお心に適いますなら、もし特別な御配慮をいただき、私の望みをかなえ、願いをお聞き入れくださるのでございましたら、私は酒宴を準備いたしますから、どうぞハマンと一緒にお願いします。明日、仰せのとおり私の願いを申し上げます。」

【使徒書日課】 使徒言行録 13章13～25節

¹³ パウロとその一行は、パフォスから船出してパンフィリア州のベルゲに來たが、ヨハネは一行と別れてエルサレムに帰ってしまった。¹⁴ パウロとバルナバはベルゲから進んで、ピシディア州のアンティオキアに到着した。そして、安息日に会堂に入って席に着いた。¹⁵ 律法と預言者の書が朗読された後、会堂長たちが人をよこして、「兄弟たち、何か会衆のために励ましのお言葉があれば、話してください」と言わせた。¹⁶ そこで、パウロは立ち上がり、手で人々を制して言った。「イスラエルの人たち、ならびに神を畏れる方々、聞いてください。¹⁷ この民イスラエルの神は、わたしたち

の先祖を選び出し、民がエジプトの地に住んでいる間に、これを強大なものとし、高く上げた御腕をもってそこから導き出してくださいました。¹⁸ 神はおよそ四十年の間、荒れ野で彼らの行いを耐え忍び、¹⁹ カナの地では七つの民族を滅ぼし、その土地を彼らに相続させてくださったのです。²⁰ これは、約四百五十年にわたることでした。その後、神は預言者サムエルの時代まで、裁く者たちを任命なさいました。²¹ 後に人々が王を求めたので、神は四十年の間、ベニヤミン族の者で、キシユの子サウルをお与えになり、²² それからまた、サウルを退けてダビデを王の位につけ、彼について次のように宣言なさいました。『わたしは、エッサイの子でわたしの心に適う者、ダビデを見いだした。彼はわたしの思うところをすべて行う。』²³ 神は約束に従って、このダビデの子孫からイスラエルに救い主イエスを送ってくださいましたのです。²⁴ ヨハネは、イエスがおいでになる前に、イスラエルの民全体に悔い改めの洗礼を宣べ伝えました。²⁵ その生涯を終えようとするとき、ヨハネはこう言いました。『わたしを何者だと思っているのか。わたしは、あなたたちが期待しているような者ではない。その方はわたしの後から來られるが、わたしはその足の履物をお脱がせする値打ちもない。』

【福音書日課】 マルコによる福音書 6章14～29節

¹⁴ イエスの名が知れ渡ったので、ヘロデ王の耳にも入った。人々は言っていた。「洗礼者ヨハネが死者の中から生き返ったのだ。だから、奇跡を行う力が彼に働いている。」¹⁵ そのほかにも、「彼はエリヤだ」と言う人もいれば、「昔の預言者のような預言者だ」と言う人もいた。¹⁶ とところが、ヘロデはこれを聞いて、「わたしが首をはねたあのヨハネが、生き返ったのだ」と言った。¹⁷ 実は、ヘロデは、自分の兄弟フィリポの妻ヘロディアと結婚しており、そのことで人をやってヨハネを捕らえさせ、牢につないでいた。¹⁸ ヨハネが、「自分の兄弟の妻と結婚することは、律法で許されていない」とヘロデに言ったからである。¹⁹ そこで、ヘロディアはヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたが、できないでいた。²⁰ なぜなら、ヘロデが、ヨハネは正しい聖なる人であることを知って、彼を恐れ、保護し、また、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、なお喜んで耳を傾けていたからである。²¹ とところが、良い機会が訪れた。ヘロデが、自分の誕生日の祝いに高官や将校、ガリラヤの有力者などを招いて宴会を催すと、²² ヘロディアの娘が入って来て踊りをおどり、ヘロデとその客を喜ばせた。そこで、王は少女に、「欲しいものがあれば何でも言いなさい。お前にやろう」と言い、²³ 更に、「お前が願うなら、この国の半分でもやろう」と固く誓ったのである。²⁴ 少女が座を外して、母親に、「何を願いましょうか」と言うので、母親は、「洗礼者ヨハネの首を」と言った。²⁵ 早速、少女は大急ぎで王のところに行き、「今すぐに洗礼者ヨハネの首を盆に載せて、いただきます」と願った。²⁶ 王は非常に心を痛めたが、誓ったことではあるし、また客の手前、少女の願いを退けたくなかった。²⁷ そこで、王は衛兵を遣わし、ヨハネの首を持って来るようにと命じた。衛兵は出て行き、牢の中でヨハネの首をはね、²⁸ 盆に載せて持って来て少女に渡し、少女はそれを母親に渡した。²⁹ ヨハネの弟子たちはこのことを聞き、やって来て、遺体を引き取り、墓に納めた。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

エステル記4章10節～5章8節

4¹⁰エステルはハタクと語り、モルデカイに次のように伝えるよう命じた。¹¹「王の家臣と王の諸州の民が皆知っているとおり、呼ばれないのに内庭に入って王のもとへ行く者は、男であれ女であれ、殺されなければならないという一つの法があります。ただ、王が金の笏を差し伸べた者だけが死を免れます。私はこの三十日間、王のもとに行くよう呼ばれておりません。」¹²エステルという言葉がモルデカイに伝えられた。¹³モルデカイはエステルに返答して言った。「あなたは、その他のユダヤ人とは異なり、王宮にいる自分は難を免れるだろうと思っはならない。¹⁴もし、この時にあなたが黙っているならば、ユダヤ人への解放と救済が他の所から起こり、あなたとあなたの父の家は滅びるであろう。このような時のためにこそ、あなたは王妃の位に達したのではないか。」¹⁵エステルはモルデカイに返答して言った。¹⁶「あなたは行って、スサにいてすべてのユダヤ人を集め、私のために断食してください。三日の間、夜も昼も、食べても飲んでいけません。私も私の侍女たちも、同じように断食します。このようにしてから、法に背くことですが、私は王のもとに行きます。もし死ななければならないのであれば、死ぬ覚悟しております。」¹⁷モルデカイは出かけて行って、すべてエステルが彼に命じたとおりに行った。

5¹それから三日目に、エステルは王妃の衣装を着け、王宮の内庭に入り、王宮に向かって立った。王は王宮の中で建物の入り口に向かって王座に座っていた。²王が庭に立っている王妃エステルを見たとき、彼女は王の好意を得た。王はエステルに、手にした金の笏を差し伸べた。エステルは近づいてその笏の頭に触れた。³王は彼女に言った。「王妃エステルよ、どうしたのか。あなたが願うのであれば、国の半分なりともあなたに与えよう。」⁴エステルは言った。「もし王様が良しとされるならば、今日私が王様のために催す酒宴に、ハマンと一緒に出席してください。」⁵王は言った。「急いでハマンを来させよ。エステルという言葉のとおりにしよう。」王とハマンはエステルが催す酒宴に来た。⁶王はぶどう酒を飲みながらエステルに言った。「あなたが望むことは何でもかなえよう。あなたが願うのであれば、国の半分なりとも与えよう。」⁷エステルは答えた。「私の望み、私の願いはこれです。⁸もし私が王様のご好意を得、望みをかなえ、願いを聞き入れていただければ、私が王様とハマンのために催す酒宴に、ハマンと一緒に出席してください。明日、私は王様の言葉どおりにいたします。」

使徒言行録13章13～25節

¹³パウロとその一行は、パフォスから船出してパンフィリア州のベルゲに来たが、ヨハネは一行と別れてエルサレムに帰ってしまった。¹⁴パウロとバルナバはベルゲから進んで、ピシディア州のアンティオキアに到着した。そして、安息日に会堂に入って席に着いた。¹⁵律法と預言者の書が朗読された後、会堂長たちが人をよこして、「兄弟たち、何か会衆のために励ましのお言葉があれば、話してください」と言わせた。¹⁶そこで、パウロは立ち上がり、手で人々を制して言った。

「イスラエルの人たち、ならびに神を畏れる方々、聞いてください。¹⁷イスラエルの民の神は、私たちの先祖を選び出し、民がエジプトの地に寄留している間に、これを強大なものとし、高く上げた御腕をもってそこから導き出してくださいました。¹⁸神はおよそ四十年の間、荒れ野で彼らの行いを耐え忍び、¹⁹カナン之地では七つの民族を滅ぼし、その土地を彼らに相続させてくださったのです。²⁰これは、約四百五十年にわたることでした。その後、神は預言者サムエルの時代まで、士師たちを任命なさいました。²¹後に人々が王を求めたので、神は四十年の間、ベニヤミン族の者で、キシユの子サウルをお与えになりました。²²それから、サウルを退けてダビデを王の位に就け、彼について次のように宣言なさいました。『私はエッサイの子ダビデを見いだした。彼は私の心に適う者で、私の思うところをすべて行う。』²³神は約束に従って、このダビデの子孫から、イスラエルに救い主イエスを送ってくださったのです。²⁴ヨハネは、イエスが来られる前に、イスラエルの民全体に悔い改めの洗礼を宣べ伝えました。²⁵その生涯を終えようとするとき、ヨハネはこう言いました。『私を何者だと思っているのか。私はその方ではない。その方は私の後から来られるが、私はその足の履物をお脱がせする値打ちもない。』

マルコによる福音書6章14～29節

¹⁴イエスの名が知れ渡ったので、ヘロデ王の耳にも入った。人々は、「洗礼者ヨハネが死者の中から生き返ったのだ。だから、あのような力が彼に働いている」と言っていた。¹⁵他の人々は「彼はエリヤだ」と言い、またほかの人々は「昔の預言者の一人のようだ」と言っていた。¹⁶ヘロデはこれを聞いて、「私が首をはねたあのヨハネが、生き返ったのだ」と言った。¹⁷実は、ヘロデは、兄弟フィリポの妻ヘロディアと結婚しており、そのことで人をやってヨハネを捕らえさせ、牢につないでいた。¹⁸ヨハネがヘロデに、「兄弟の妻をめとることは許されない」と言っていたからである。¹⁹そこで、ヘロディアはヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたが、できないうでいた。²⁰なぜなら、ヘロデが、ヨハネは正しい聖なる人であることを知って、彼を恐れ、保護し、また、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、なお喜んで耳を傾けていたからである。²¹ところが、良い機会が訪れた。ヘロデが、自分の誕生日に重臣や将校、ガリラヤの有力者たちを招き、宴会を催すと、²²ヘロディアの娘が入って来て踊りを踊り、ヘロデとその客を喜ばせた。そこで、王は少女に、「欲しいものがあれば何でも言いなさい。お前にやろう」と言った。²³さらに、「お前が願うなら、私の国の半分でもやろう」と固く誓ったのである。²⁴そこで、少女は座を外して、母親に、「何を願いましょうか」と言うと、母親は、「洗礼者ヨハネの首を」と言った。²⁵早速、少女は大急ぎで王のところに戻り、「今すぐに、洗礼者ヨハネの首を盆に載せて、いただきとうございます」と願った。²⁶王は非常に心を痛めたが、誓ったことではあるし、また列席者の手前、少女の願いを退けたくなかった。²⁷そこで、王はすぐに衛兵を遣わし、ヨハネの首を持って来るように命じた。衛兵は出て行き、牢の中でヨハネの首をはね、²⁸盆に載せて持って来て少女に与え、少女はそれを母親に渡した。²⁹ヨハネの弟子たちはこのことを聞き、やって来て、遺体を引き取り、墓に納めた。

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

- ・6月28日「聖霊降臨節第6主日」の日課主題は「神の計画」。
- ・旧約日課は、「エステル記」から、王妃エステルがユダヤ人絶滅計画を阻止するために王に奏上する決意をしたことを物語る箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、バルナバとパウロの宣教団がピシディア州アンティオキアで活動した際の様子を伝える箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、洗礼者ヨハネが殺された経緯を伝える箇所。

旧約日課(エステル 4~5章より)

- ・「エステル記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)の区分で「諸書」の小区分「五つの巻物(ハメシュ・メギロト)」の一つとして扱われる時代物語文書。「五つの巻物」(「雅歌」「ルツ記」「哀歌」「コヘレトの言葉」「エステル記」)は、歴史的に一部のユダヤ教の諸祭に際して会堂で朗読される書物として位置づけられて用いられており、本書は、この物語中に起源譚として描かれる「プリム祭」に際して用いられている。
- ・本書の物語は、ペルシア王クセルクセスが命令を拒んだ王妃ワシュティを退位させ、代わる王妃としてユダヤ人エステルが選ばれたという逸話から始まり、彼女の事実上の後見人であるユダヤ人モルデカイが、王の高官ハマンの策するユダヤ人絶滅計画に気づき、その謀略をエステルによって王に伝えさせることで阻止し、ハマンの失脚をもってこれを記念するユダヤ人が「プリム祭」を祝うようになったと展開する。本書全体として「プリム祭」の起源譚となっている。
- ・本書には、「神」や「主」への言及が無い。
- ・本書は、ペルシア王クセルクセス(在位=前486~465年頃)の時代を背景に、同王の王宮で繰り広げられた出来事として物語られているが、史実性は乏しい。本書では、クセルクセス王の王妃ワシュティがその身分を解かれて新しい王妃として選ばれたのがユダヤ人の娘エステルであったと語られるが、歴史上のクセルクセス王の王妃は「アメストリス」の名で知られる王家と姻戚関係にある貴族出身の女性で、ギリシアの歴史家らによって王に並ぶ権力を有していたことでも知られている。また、本書に登場するユダヤ人「モルデカイ」と「エステル」の名は、バビロニア神話における重要な神々である「マルドゥク」と「イシュタル」に由来する名であり、バビロニア文化を取り込んだペルシア支配時代に最もペルシア化したユダヤ人を象徴する名として充てられたものと推認されている。ペルシア支配時代にユダヤ人が組織的な迫害を受けたという記録は皆無であり、多くの聖書学者は、続くヘレニズム時代にギリシア人支配者のシリアによって受けた弾圧およびそれに対する抵抗運動(前2世紀のマカベア戦争など)を背景に創作された時代物語と考えている。
- ・本書には、「旧約聖書続編」に納められているギリシア語版が知られている。ギリシア語版は、正典版に比して1.5倍ほどの分量を有し、正典版には無いさまざまな逸話が含まれている。また、正典版と違い、「主」や「神」への言及が複数含まれている。

使徒書日課(使徒 13章より)

- ・「使徒言行録」は、「ルカによる福音書」の続巻として著された「初代教会正史」を描く歴史物語文書。概要は、資料「聖書と祈りの会 260520」など参照。
- ・日課箇所は、シリア州アンティオキアの教会から派遣されたバルナバとパウロ(サウロ)を中心とした宣教団が、最初の活動地キプロス島を経てアナトリア半島での活動を展開した初期の様子を伝える箇所。パンフィリア州ベルグを経てピシディア州アンティオキアに到達し、その地の会堂に入って宣教活動を行った様子が描かれている。
- ・ピシディア州アンティオキアは、アナトリア半島の中部に位置する内陸都市。当時、「アンティオキア」の名で呼ばれる都市は、ローマ帝国内各地にあった。この都市名は、元来、セレウコス朝シリア(前312年~前63年)の初期に、その支配地域内の各地で建設された16都市に、初代王セレウコスI世の父アンティオコスの名を記念して付された。セレウコス朝シリアの歴代王には「アンティオコス」の王名を冠する者が少なくない。
- ・本書が描くバルナバやパウロの宣教活動は、原則として必ず各都市でその地のユダヤ会堂に入り安息日礼拝を共にすることから始められたものとされている。ユダヤ会堂の安息日礼拝は、地域の会堂共同体に属する住民(「ユダヤ人」および「改宗者」)だけでなく、旅行中のユダヤ人や礼拝に参加することを願う異邦人(「神を畏れる者」)にも開かれていた。また、礼拝の主要な部分は会堂長や住民男性によって担われたが、会堂長に指名された旅行者が聖書朗読や説教、スピーチを行うこともあった。日課箇所でも、パウロらは、旅行者として挨拶を求められて演説している。このような宣教スタイルは、実際に彼らが入り込んでいたことと考えられるが、「ルカ文書」(福音書+使徒言行録)では、主イエスの最初の宣教描写をナザレの会堂における安息日礼拝における逸話として特に強調して描いており(ルカ4章)、パウロらの宣教スタイルが主イエスのそれに倣ったものであることを強調する意図が示されていると考えられる。実際、「使徒言行録」の描くパウロらの宣教活動でも多くの場合に、主イエスのナザレ会堂における場合と同様、話を聞いたユダヤ人たちの間で激しく賛否が分かれ、反対派を逃れるようにして町を離れなければならなくなる様子が描かれている。
- ・パウロが会堂で語ったとして記されている演説(説教)は、実際になされたものの記録とは考えられないが、本書で繰り返し記される使徒やパウロの演説に一定のパターンが確認され、おそらく初期教会において定型化しつつあった使徒的宣教使信を素材として場面ごとに適宜配置しているものと考えられる。共通するパターンは、旧約正典の物語るイスラエル救済史を大前提として示しながら、その救済史を主イエスに接続する存在として洗礼者ヨハネが位置づけられ、主イエスにおいて完成された神の救済計画を宣言するものとなっている。このパターンは、アテネのアレオパゴスでギリシア人らを対象とした演説(17章)を除けば、ほとんどの場合に定型として確かめられる。

福音書日課(マルコ 6 章より)

・日課箇所は、主イエスが「洗礼者ヨハネの生き返り」であるという風説が流布したことを巡って「洗礼者ヨハネの死」についての逸話を伝える箇所。

・共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝えているが、「ルカ」はヨハネの死についての詳細な逸話は省略しており、「マタイ」も「マルコ」に比べると要点に簡略化して伝えている。「ルカ」の場合、洗礼者ヨハネの死に触れながらも、焦点を主イエスから外さないという意図が明確である。「マタイ」の場合、「マルコ」が「ヘロデ」の心理の機微に触れる描写をしている箇所を省こうとしているとも考えられる。他方で、「マタイ」と「ルカ」は、主イエスと洗礼者ヨハネの関係を示す逸話として、ヨハネの弟子たちが主イエスのもとに遣わされて問うことから始まった主イエスの証言を詳しく伝えている(マタイ 11:2~18、ルカ 7:18~35)。

・この箇所に登場する「ヘロデ」は、主イエスの誕生譚に登場する「ヘロデ大王」ではなく、その息子たちの一人で「ガリラヤの領主」として知られる「ヘロデ・アンティパス」。ヘロデ大王の息子たちは、ローマ元老院から父王の支配領域を四分した領地を支配する「領主」を名乗ることしか許されなかった。逸話の中で触れられる「兄弟フィリポ」は、「ヘロデ・フィリップス」の名で知られる領主の一人。

・「ヘロディアの娘」は、名を示されずに登場するが、1世紀のユダヤ人歴史家フラヴィウス・ヨセフスの著した『ユダヤ古代誌』による「サロメ」と同定され、通例この名で知られている。ただし、ヨセフスは同書で、サロメの父親を「フィリップス」とは別の「ヘロデ」とし、彼女が叔父にあたる「フィリップス」と結婚したが、フィリップスが子を残さずに死んだので継父「アンティパス」の兄弟である「アリスとブロス」と再婚した、と伝えており、「福音書」とは諸事情が一致しない。他方で「マルコ福音書」には、同名の女性が弟子の一人として挙げられているが(15:40、16:1)、「サロメ」はヘブライ語「シャローム」に基づくユダヤ人女性に広く付けられた名であることが知られており、同一人物とは考え難い。いずれにしろ、「福音書」にしてもヨセフスにしても、同族の中に複数いた「サロメ」名の女性を混同している可能性を排除できない。

・日課箇所は、主イエスの評判についての風評を、「洗礼者ヨハネの生き返りだ」というものだけでなく、「エリヤだ」あるいは「預言者だ」というものを並べて伝えている。このような評判については、「ペトロの信仰告白」とされる逸話箇所(マタイ 16:13 以下、マルコ 8:27 以下、ルカ 9:18 以下)でも伝えられている。ここで言われる「エリヤ」は、「マラキ書」3:23 に基づいて黙示的終末論として流布していた「終末に再臨するエリヤ」のことを指しており、「共観福音書」は、「洗礼者ヨハネ」を「再臨のエリヤ」と位置づけることによって、「エリヤの再臨」に続いて到来するはずの「主の日(終りの日)」がすでに到来し、そのときに現れるはずの者として「主イエス」を位置づけるという終末的救済観を組み立てている。「エリヤ」に関する主イエスの発言は、「山上の変貌」の出来事に続く下山時の弟子たちの対話箇所(マルコ 9:9 以下など)を参照。

来週の誕生日 (6月28日~7月5日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-357「力に満ちたる」(= I 77 番「み神はちからの」)は、22歳で早世した 18-19 世紀英国の詩人 H. ホワイトが、ドイツのカトリック讃美歌集(1784 年版)で「アヴェ・マリア、光り輝く暁の星よ」に付されていた曲に合わせて作詞した讃美歌。
- ・21-51「愛するイエスよ」(I-19 番「みこえきくとて」)は、17 世紀ドイツの牧師クラウスニツァーの作詞で、各国で広く歌われている讃美歌。「説教の前に」という原題が付されている。曲は、17 世紀ドイツの教会音楽家アーレの作曲で、最初はアドヴェントの独唱曲のために作られたが、後に出版された讃美歌集でクラウスニツァーの歌詞と組み合わせられた。
- ・21-504「主よ、み手もて」(= I 285 番)は、19 世紀スコットランドの牧師ボナーの作詞に、19 世紀の作曲家ウェーバーの「魔弾の射手」序曲の旋律を讃美歌用に編曲した曲が組み合わせられている。現代の英語讃美歌集ではほとんど採用されていない。

21-357「力に満ちたる」

The Lord of our God is clothed with might

1. The Lord our God is clothed with might, / The winds obey His will; / He speaks, and, in His heavenly height, / The rolling sun stands still.
2. Rebel, ye waves, and o'er the land / With threatening aspect roar; / The Lord uplifts His awful hand, / And chains you to the shore.
3. Howl, winds of night, your force combine; / Without His high behest, / Ye shall not, in the mountain pine, / Disturb the sparrow's nest.
4. His voice sublime is heard afar, / In distant peals it dies; / He yokes the whirlwind to His ear, / And sweeps the howling skies.
5. Ye nations, bend, in reverence bend; / Ye monarchs, wait His nod, / And bid the choral song ascend / To celebrate your God.

21-51「愛するイエスよ」

Liebster Jesu, wir sind hier, dich und dein wort

1. Liebster Jesu, wir sind hier, / Dich und Dein Wort anzuhören; / lenke Sinnen und Begier / hin auf Dich und Deine Lehren, / dass die Herzen von der Erden / ganz zu Dir gezogen werden.
2. Unser Wissen und Verstand / ist mit Finsternis verhület, / wo nicht Deines Geistes Hand / uns mit hellem Licht erfüllet; / Gutes denken, tun und dichten / musst Du selbst in uns verrichten.
3. O Du Glanz der Herrlichkeit, / Licht vom Licht, aus Gott geboren, / mach uns allesamt bereit, / öffne Herzen, Mund und Ohren; / unser Bitten, Flehn und Singen / lass, Herr Jesu, wohl gelingen.

21-504「主よ、み手もて」

Thy way, not mine, O Lord

1. Thy way, not mine, O Lord, / However dark it be: / Lead me by thine own hand: / Choose out the path for me. / Smooth let it be or rough, / It will be still the best; / Winding or straight, it leads / Right onward to thy rest.
2. I dare not choose my lot; / I would not, if I might; / Choose thou for me, my God: / So shall I walk aright. / Take thou my cup, and it / With joy or sorrow fill, / As best to thee may seem; / Choose thou my good and ill.
3. Choose thou for me my friends, / My sickness or my health; / Choose thou my cares for me / My poverty or wealth. / Not mine, not mine the choice, / In things or great or small / Be thou my Guide, my Strength, / My Wisdom, and my All.